

遺伝カウンセリングの最前線

⑩ 遺伝リテラシー向上と将来の遺伝診療

北大病院臨床遺伝子診療部 副部長

山田崇弘 (産科)

これまで私たちが連載してきた「遺伝カウンセリングの最前線」も最終回を迎えました。最後は遺伝リテラシー向上への取り組みと将来の遺伝診療について見解を述べま

す。2012年の夏に無傷の出生前遺伝学的検査(NIPT)についてセン

ンサーショナルな報道がなされました(第2回参照)。この報道により多くの混乱が起きました

たことがないかと答えていきます。また、日本の学校教育課程ではヒトの遺伝子については高等教育でこ

く一部取り上げられていくのみで、初等教育では人間の尊厳や人命の尊

さや学ぶ上で重要な多様な性や唯一性について取り上げられるチャンスもあ

りません。こういつたこととから日本における遺伝リテラシーがまだまだ十分でないことが分かります。遺伝学とは「継承と多様性の学問」として定義されていますが、実際のところ日本では継承の面

は？ 知ってしまうこと、問題を私たちは突きつけ患者に対して一般臨床

ここで重要定遺伝カウンセリング、遺伝専門看護職といった職種がチームを組んで

の向上ではさらに遺伝情報を扱う専門家やバイオインフォ

私たちが北大臨床遺伝子診療部スタッフ(写真)は、これからの遺伝医療と成熟した社会の基礎となる遺伝リテラシーの向上のために積極的に貢献して行きたいと考えています。(おわり)

